

## ガザ聖家族教会に軍事攻撃 3人死亡、司祭ら多数負傷



7月17日、パレスチナ・ガザの病院で治療を受ける聖家族教会主任司祭のガブリエル・ロマネッリ神父。初期報道によると同教会へのイスラエル軍戦車からとされる砲撃で足を負傷している(OSV)



イスラエル軍による砲撃を受けたガザの聖家族教会(OSV)

### 教皇、和平交渉主催の意思再び



7月9日、ローマ南東のカステルガンドルフォの教皇夏季別荘でウクライナのゼレンスキー大統領と会談した教皇レオ14世(CNS)

### 能登半島地震から1年半



被災建物の解体・撤去を終えた今春以降、空き地の状態が続く石川県輪島市の朝市通り周辺(写真提供:カリタスのとサポートセンター)

#### 国際

- 教皇、イスラエル首相と電話 和平交渉再開と即時停戦促す 2面
- 教皇、ゼレンスキー氏と会談 2面
- 教皇、「イエスのみ心」祭日のミサ 3面
- 教皇、「環境危機」認める回心を祈る 3面
- 教皇、「キリストに従い主と同じ心を」 4面

#### 国内

- 能登半島地震から1年半 見えない孤独 続く支援 5面
- 国内記事ダイジェスト 6面
- 定例司教総会 各委員長・担当司教を改選 7面
- 映画「長崎 ― 閃光の影で ― 」監督インタビュー 8面

- 主日の福音解説 9・10・11面
- 短歌・俳句 11面
- 訃報・告知板・番組 12面
- きょうをささげる(8月の祈り) 12面

オンラインで日々ニュースを配信している「カトリックジャパンニュース」のダイジェスト紙、月刊「カトリックジャパンダイジェスト」をお届け致します。(「カトリックジャパンニュース」には下記QRコードからアクセス可)

### カトリックジャパンニュース



国際

# 教皇、イスラエル首相と電話 和平交渉再開と即時停戦促す

【バチカン7月18日CNS】イスラエルのベニヤミン・ネタニヤフ首相から教皇レオ14世に電話があり、教皇は同首相にパレスチナ・ガザでの戦闘について和平交渉を再開し、即時停戦を実現するよう促した。

ローマの南東カステルガンドルフォに滞在する教皇に7月18日朝、かかってきた電話は、前日にイスラエル軍がガザで唯一のカトリック教会である聖家族教会敷地内を攻撃したことを受けたものだった。砲弾やがれきの飛散で少なくとも3人が死亡し、主任司祭のガブリエル・ロマネッリ神父を含む10人以上が負傷した。

「通話の間、教皇は改めて、(同首相に)交渉努力に向かい、停戦と戦闘の終結を実現するよう求めた」と教皇庁広報局は声明で述べた。

「教皇は再度、ガザの市民の悲劇的な人道状況と、特に子どもたちや高齢者、病者が強いられている心が引き裂かれるような犠牲への憂慮を表明した」と声明は続けている。

「通話の最後に、教皇は改めて礼拝所と信者たち、そしてパレスチナとイスラエルの全ての人を守ることの緊急性を強調

した」と声明は付け加えた。

教皇は前日の17日にも攻撃発生後の弔電で、現地での即時停戦と対話、平和を呼びかけていた。

同日朝に攻撃があった時点で、約600人の男女と子どもたちが聖家族教会に避難していて、そのうち障害のある人と病気の子どものうち約50人は「神の愛の宣教者会」のケアを受けていた。

### ガザ訪問の枢機卿にも電話 「この殺りく終わらせる時」

教皇レオ14世は7月18日、ラテン典礼エルサレム総大司教のピエルバッティスタ・ピッツァバッラ枢機卿とも電話で話し、「この殺りくを終わらせる時」だと伝えた、とバチカンニュースは報じた。

ピッツァバッラ枢機卿とギリシャ正教会エルサレム総主教テオフィロス3世は、ガザに大量の人道支援物資を届ける使節団を指揮していた。

使節団が越境してガザに入るところで、教皇から同枢機卿に電話があり、教皇は「寄り添いと愛と祈りと支えを伝え、停戦だけでなくこの悲劇を終わらせるためにできる限りの全てのことをしたいとの望みを表明した」と同枢機卿はバチカンニュースに語った。

「教皇レオは繰り返し、この殺りくを終わらせる時だとして、いま起っていることは正当化できず、私たちはこれ以上の犠牲者が出ないようにしなければならぬと話しておられました」と同枢機卿は付け加えた。

に発表した声明で述べている。

両者は同日午後、ローマ南東のカステルガンドルフォにある教皇夏季別荘で会談した。非公開の会談は約30分間に及んだ。教皇はゼレンスキー大統領に、「継続中の紛争と公正で恒久的な平和の緊急な必要性」について話した、と同広報局の声明は明らかにした。

「教皇は改めて、和平交渉のためにロシアとウクライナの代表をバチカンに迎え入れることに意欲を示した」と声明は付け加えた。



### ガザへの人道支援使節団 食料や医療物資など運ぶ

ガザの全ての人々が「忘れられることなく、見捨てられることもありません」とラテン典礼エルサレム総大司教座は7月18日、声明で強調した。

「ガザの聖家族教会敷地内への悲惨な攻撃を受けて」、ピッツァバッラ枢機卿とテオフィロス総主教は教会の使節団を率いてガザに入り、「ガザの共同体に対して、聖地の諸教会が共にする司牧的配慮と憂慮を表している」と声明は説明する。

「ラテン典礼総大司教座による要請と人道支援団体との調整によって、現地入りが可能になり、キリスト教共同体だけでなく、できるだけ多くの家庭に必要な支援を届けられることになった」と声明は続ける。

「この支援物資には、大量の食料と応急処置キットや緊急に必要な医療機器も含まれている。さらに総大司教座は攻撃で負傷した人を治療が受けられるガザの外の医療機関へ搬送する手配も保証する」と声明は付け加えている。

「使節団は滞在中に、地元キリスト教共同体のメンバーと会い、哀悼の意と連帯を伝えて、今回の事件で苦しんでいる人々に寄り添う」と声明は述べている。ピッツァバッラ枢機卿は「自ら、共同体の人的かつ司牧的必要性を判断し、教会による介在と対応の継続を導く助けとする」。

### 聖地に関する直近のニュース

- 7月14日  
**ガザの教会共同体は戦争で疲弊  
食料不足も、祈りで希望つなく** 
- 7月15日  
**聖地の教会指導者らが訪問  
入植者の襲撃に遭う共同体** 
- 7月17日  
**ガザ聖家族教会に戦車攻撃  
3人死亡、司祭ら多数負傷** 
- 7月20日  
**教皇、「戦争の蛮行」を非難  
イスラエルのガザ教会攻撃** 
- 7月21日  
**教皇、パレスチナ大統領と会談  
ガザの人道悲劇について電話で** 



7月20日、危機的な飢餓に見舞われているパレスチナ・ガザの中部の給食施設で、食料を受け取ろうと集まる人々 (OSV)

## 教皇、ゼレンスキー氏と会談 和平交渉主催の意思再び表明

【バチカン7月9日CNS】教皇レオ14世は7月9日、ウクライナのウォロディミル・ゼレンスキー大統領と会談し、和平交渉のためにロシアとウクライナの代表をバチカンに迎え入れる準備があるとする意思を改めて表明した。

「友好的な会話の中で、敵対関係を終わらせるための望ましい手段として、対話の重要性が再確認された」と教皇庁広報局は会談後

## 国際

## 教皇、「イエスのみ心」祭日のミサ 司祭は一致して心を開き主に従う

【バチカン6月27日CNS】司祭たちは神の限りない愛に抱かれて生まれ、どんな類いの分裂も憎しみもあってはいけないことに気付くことを求められている、と教皇レオ14世は強調する。

「キリストのみ心から豊かにあふれる愛によって互いに和解し、一致して、変えていただき、私たちは共に謙遜に決然として、堅い信仰のうちに全ての人にいつくしみのうちに心を開いて、主の足跡に従いましょう」と教皇は全世界の司祭たちに向けて呼びかけた。

「私たちの世界に、御父によって愛され、選ばれて派遣されたと知ることによって得た自由とともに、復活された主の平和をもたらしましょう」と教皇は6月27日、バチカンの聖ペトロ大聖堂で司式した「イエスのみ心」の祭日と「司祭の聖化のための世界祈願日」に当たってのミサ説教で、司祭たちに促した。

教皇はこのミサで、23日から27日まで続いた聖年の「神学生」「司教」「司祭」の祝祭を締めくくった。教皇が祝祭の間に繰り返し説いたのは、自らの召命の基礎を神の愛とイエスとの友情、聖霊のつくり変える力に据える必要や、意味と希望に飢え渴く世にあって一致して宣教者となる必要に

ついてだった。

教皇レオ14世は27日のミサで、アジアとアフリカ、南北アメリカ大陸、欧州、オセアニア出身の32人を司祭に叙階した。

### 「分裂も憎しみも存在する余地はない」

教皇は受階者たちにこう語りかける。「私が言いたいのは素朴なことです、それは皆さんの将来と皆さんに委ねられる魂の未来にとって重要なことだと考えています」

「神と皆さんの兄弟姉妹を愛して、自分自身を惜しみなくささげてください。熱心に秘跡の執行や祈り、特に聖体礼拝、司牧奉仕にいそしんでください」と教皇は促す。「群れの近くに寄り添って、皆さんの時間と気力を惜しむことなく、分け隔てなく、誰にでも与えてください。それは十字架につけられたキリストの脇腹の傷と聖人たちの模範が私たちに教えていることです」

「今日の世界では、あまりにも頻繁に、不確かで長続きしない成功のモデルが示されています。そんなことに引き込まれないでください」と教皇は注意を促す。

「それよりも、ほとんど隠れていて控えめながらも堅固な模範とその使徒職の美り



6月27日、教皇レオ14世は32人を司祭に叙階した。叙階式でひれ伏す新司祭たち(CNS)

に目を向けてください。それは主と兄弟姉妹に信仰と献身で奉仕してきた生き方です。その人たちの記憶を、皆さん自身の誠実な奉仕で保ち続けてください」

教皇レオ14世は司祭たちに向けて強調する。イエスのみ心は「特に私たちに委ねられています。それは私たちが、み心を世に示すことができるようになるためです」。

司祭たちが救いのわざに貢献する方法はいくつもあると教皇は指摘する。その中でも第一に挙げられるのは、「良い羊飼い」に倣うことで、群れをいつも心にかけて、離れている人を捜しに行き、傷ついた人を助けて、弱っている人や病気の人を力づけることだと語った。

「大規模で破壊的な紛争が広がるこの時代に、神の愛は限りがありません。私たちはその愛に包まれて生まれ、神の目には、そして私たち自身にとっても、どんな類いの分裂も憎しみも存在する余地はないことに気付くよう招かれています」と教皇は付け加えた。

## 「被造物の保護のためのミサ」 「環境危機」認める回心を祈る

【ローマ7月9日CNS】教皇レオ14世は7月9日、新しい式文による「被造物の保護のためのミサ」をささげ、「私たちは、共に暮らす家を守る緊急の必要性をまだ認識していない、教会の中と外の多くの人の回心のために祈らなければなりません」と強調した。

教皇はローマの南東およそ30キロにあるカステルガンドルフォの教皇夏季別荘の庭園で、小鳥のさえずりを聞きながらミサ



7月9日、ローマ南東のカステルガンドルフォにある「ラウダート・シ村」エコロジーセンター敷地内の庭園で、「被造物の保護のためのミサ」をささげる教皇レオ14世(CNS)

をささげた。

ミサには教皇フランシスコが示した総合的エコロジーを促進する方針に基づいて創設された「ラウダート・シ村」のスタッフらが参加していた。

教皇レオ14世はミサの説教で、「地球温暖化や武力紛争によって焼けつくように燃える世界にあって」恐れに見舞われている今日の人々は、ちょうどキリストが鎮めた嵐に遭っている弟子たちのようだと指摘する。それでも、「私たちに希望があります。私たちはイエスのうちに希望を見いだしました」と付け加えた。

「被造物を守り、平和と和解をもたらす私たちの使命は、イエスご自身の使命であり、主が私たちに委ねられた使命です」と教皇は強調する。「私たちは大地の叫びを聞き、貧しい人々の叫び声を聞きます。こうした叫びは神のみ心に届いているから

です。私たちの憤りは神の憤りで、私たちの働きは神のわざです」

### 「観想のまなざし」が 環境を危機から救う

教会は「気候危機」に対して預言しなければならず、「それには、この世の『君主たち』の破壊的な力に反対する勇敢ささえも求められるのです」と教皇は続ける。

「創造主と被造物の間の不滅の契約は、私たちの知性と努力を結集させます。それは悪が善に変わり、不正義が正義に、強欲が交わりが変わるためです」

教皇レオ14世は、教皇フランシスコの2015年の回勅『ラウダート・シ』ともに暮らす家を大切に』からの引用を交えて、アッシジの聖フランシスコが生涯のうちで、あらゆる被造物を「兄弟、姉妹、母」と呼ぶまでに至ることで成し遂げた被造界との調和を思い起こす。

「観想のまなざしだけが、私たちの被造物との関係を変え、環境危機から私たちを助け出すことができます。環境危機の原因は、罪によって引き起こされる、神との関わり、隣人との関わり、大地との関わり、破壊です」と教皇レオ14世は説明した。

## 国際

## 教皇、避暑先の小教区でミサ キリストに従い主と同じ心を

【バチカン7月13日CNS】愛とつくしみにあふれるキリストを信じて従うことで、主が心の中に来てくださり、主と同じ思いやりに心を宿すことができるようになる、と教皇レオ14世は強調する。

「それは、共感する心、道の向こう側を行かずに見つめるまなざし、人を助け、傷を癒やす手、苦しんでいる人の重荷を共に担う力強い肩を持つことです」と教皇は7月13日朝、司式したミサの説教で説明した。

教皇はカステルガンドルフォの教皇夏季別荘から町の中央広場を隔てた小さな教会、ピラノバの聖トマス教会でミサをささげた。教皇は7月6日に短い夏休みのため現地に入っていて、20日まで滞在する。

教皇レオ14世はミサの説教で、当日の福音箇所だった「善いサマリア人」のたとえについて話した。

「このたとえは今日でも、私たち自身の生活について問いかけ続けています」と教皇は指摘する。「眠っているか、ぼんやりしている私たちの良心の落ち着きぶりを揺るがすのです。そして、生ぬるい信仰という危険に立ち向かうよう私たちを促します。この信仰は、うわべだけの律法の順守によって秩序を保っているだけで、神と同じつくしみに深い思いによって感じ取り、行動することができないからです」

「実際、共感がこのたとえの核心にあります」と教皇は続ける。「大切な鍵は、私たちがどのように他者を見つめるかにあります。それが私たちの心の中にあるも



7月13日、ピラノバの聖トマス教会でささげたミサで説教する教皇レオ14世(CNS)

のを表すからです。私たちは見て見ぬふりをして通り過ぎることも、まなざしを向けて共感を覚えることもできるのです」

このたとえは全てのキリスト信者にとって重要な挑戦となる、と教皇は説明する。「キリストはいつくしみ深い神を示す方です。ですから、キリストを信じ、その弟子としてキリストに従うことは、私たちもキリストと同じ思いを抱くことができるように、つくり変えられることなのです」

「キリストによって癒やされ、愛されて、私たちもこの世で、キリストの愛とつくしみのしるしとなるのです。兄弟姉妹の皆さん、今日、私たちはこの愛の革命を必要としています」と教皇はミサに参加した信者たちに語りかける。

### 最後に悪と死に打ち勝つのは愛

エルサレムからエリコに至る道は今日、「悪と苦しみと貧困の深みに陥った全ての人々が通る道です。それは、苦難を背負い、人生のさまざまな状況によって傷ついた多くの人々の歩む道です。道に迷い、どん底に至るまでに『落ちてしまった』人々の歩む道です」。

今日の道は、「衣類を剥ぎ取られ、持ち物も奪われ、抑圧的な政治体制と、貧困を余儀なくする経済と、夢もいのちも減ぼしてしまう戦争の犠牲となった多くの人々の歩む道です」と教皇は続ける。

「私たちはどうするのでしょうか。見て見ぬふりをして道の向こうを通り過ぎるのか、それとも、このサマリア人のように心を刺し貫かれるのでしょうか。私たちは時として、義務を果たすだけで満足してしまいます。または、自分たちの仲間、自分たちと同じ考えの人、国籍や宗教が同じ人だけを隣人と見なしてしまいます」と教皇は会衆に問いかける。

「ところがイエスは、傷ついた人の隣人となった異邦人で異教徒のサマリア人を私たちに示すことによって、私たちの物の見方を覆します。そして、同じようにすることを私たちに求めます」と教皇レオ14世は強調する。

「道の向こうを通って行くのではなく見ること。慌ただしい歩みを止めること。そして、それが誰であろうと、困窮と苦しみを抱えた他者の人生によって心を引き裂かれること。このことが、私たちが互いに隣人とし、真のきょうだい愛を生み出し、壁や囲いを打ち倒します」

「最後には愛が打ち勝ち、悪と死よりもはるかに強いことが示されます」と教皇は付け加えた。

### 世界の司教、「気候正義」を訴える 利益優先の「偽りの解決策」糾弾



7月1日、バチカンで、世界各地の司教協議会連盟の会長たちと会見する教皇レオ14世(OSV)

【ローマ7月1日OSV】アジアやアフリカ、ラテンアメリカ・カリブ海の司教協議会連盟は7月1日付で文書を発表し、全世界の指導者たちに向けて気候危機への対応を求め、共通善よりも利益を優先する「偽りの解決策」を糾弾した。



### 12年ぶりに教皇が夏季別荘へ 「体と心の力を回復するため」



7月6日、避暑地カステルガンドルフォに到着し、人々にあいさつする教皇レオ14世(CNS)

【カステルガンドルフォ(イタリア中部)7月7日CNS】ローマの南東約30キロにある避暑地カステルガンドルフォは、夏休みを過ごす教皇を12年ぶりに迎えた。教皇レオ14世は7月6日午後、夏季教皇別荘に滞在するため現地に移動した。滞在は7月20日まで。



### シノドス事務局が指針を発表 「実践段階」を歩む地方教会

【バチカン7月8日CNS】全世界の地方教会と司教たちは、シノダリティー(共に歩む旅)についてのシノドス(世界代表司教会議)第16回通常総会の2024年『最終文書』による提案の実践を進め、その精神を養う上で重要な役割を果たす、とバチカンのシノドス事務局は指摘している。

シノドス事務局が7月7日、公表した新しい文書は「シノドス実践段階のための旅程」と題され、司教たちとシノドスチームに指針を示し、シノドス『最終文書』の提案を地元の教会で実践する上での発案を分かち合うよう招いている。

さらには、最近シノドス事務局に寄せられた主要な質問への回答も示そうとしている。



## 国内

能登半島地震から1年半  
見えない孤独 続く支援

石川県七尾市で解体・改修前の被災家屋から家具などを搬出、分別する「カリタスのとサポートセンター」のボランティアら(7月18日)

2024年元日に起きた能登半島地震から、7月1日で1年半が過ぎた。これまでに犠牲となった人は、被災した石川、新潟、富山の3県で災害関連死を含め618人に上る(7月1日時点)。

石川県は、今年10月をめどに被災建物の公費解体を完了する計画。解体の申請件数は増加しているが、既に解体見込み棟数の81%に当たる約3万2000棟の解体が完了している(6月末時点)。

カトリックの支援拠点となっている「カリタスのとサポートセンター」代表の片岡義博神父(名古屋教区)は、至る所で解体工事が進む様子に復興の勢いが感じられた一方、「空き地」が増えていく町を見て「複雑な思い」になったとこう話す。

「初めて来られる方は、その空き地を見て何も感じないかもしれないが、震災時はそこに建物があった。これからこの空き地はどうなっていくのだろうか」

能登半島は過疎化が進む地域だ。震災後、自宅を公費解体した住民の中には経済的負担、今後の生活設計の不確実性、そして心理的負担などから自宅再建をちゅうちょし、解体後の土地を空き地のままにしている人たちもいる。自治体が「公費」で行うのは建物の解体と撤去までで、その後の建物や生活の再建は対象にならない。

## 誰ひとり置き去りにしないように

能登を管轄する名古屋教区は、地震発生後、早い段階で「カリタスのとサポートセンター」を立ち上げた。教区の支援方針は、「誰ひとり、置き去りにしないように 一声なき声を聴き、ともに歩みながら」。

「空き地」の今後は見えないが、これまで支援を続けてきたカトリックの人たちに宛てて今年3月、1通の感謝の手紙が届いた。差出人は千葉県の会社員、山本明美(57/仮名)さん。

山本さんの母、山田綾子さん(83/仮名)は、石川・輪島市の山間部に1人で暮らす。手紙には母、綾子さんに毎週物資を届け続けているカトリックの支援者への感謝がつづられていた。

山本さんによれば、母親の綾子さんが住む実家は市街地から12キロ離れた山間部にある空熊町<sup>そらくままち</sup>。主要な道路は能登半島地震と昨年9月の水害で不通となり、崩れかけた約20キロの道<sup>うかい</sup>を迂回しなければ、今でもたどり着けない。電気は復旧したものの電話は現在も不通のまま。郵便配達も週に1度のみで、宅配便は配達を中止したままになっている。

集落では転居する人が相次ぎ、人口は半減した。残った人たちも昨年12月には次々に仮設住宅に入居し、綾子さんは、集落で1人になってしまったという。山本さんは夫と共に毎月、車で空熊町に通っているが、それも千葉県からでは限界がある。

「誰もいなくなった集落で、救急車さえ来てくれるかどうか分からない山の中で、母は果たして暮らしていけるのだろうかと心配でなりませんでした」

## カトリックのネットワークの力

人手不足や高齢化は教会も例外ではないが、「カリタスのとサポートセンター」は、立ち上げの時からカトリックのネットワークの中で活動が続けられてきた。地元の司祭と信徒、修道会、カリタスジャパン、経験豊かな緊急支援チーム(ERST)、昨年6月からは支援の輪に女子修道会が加わった。修道会の枠を超えて修道女たちが奉仕のバトンをつなぐ「シスターズリレー」は東日本大震災の復興支援で始まった。能登でもこの1年で延べ26の女子修道会から50人が参加。30代から80代までの修道女たちが原則2人ずつ、2週間を目安に交代しながら能登に入っている。

「カリタスのとサポートセンター」のボランティアたちはこれまで、断水地域への水の提供や、人と人をつなぐカフェの運営など、地域の必要に寄り添いながら地道な活動を続けてきた。

修道女たちはボランティアが寝起きするベース(拠点)を清潔に整

えたり、食事を準備したりする。おかげでボランティアたちは、手作りの夕食を囲んで交流の時間を持つことができる。修道女たちは手が足りなければ水や物資を届ける支援など、ボランティアらと共に行う。そう



ボランティアベースでの朝食

した活動の全てを、全国の修道女たちが日々、祈りで支えている。

## 「人とのつながりが 母を明るく前向きに」

山本さんの手紙は続く。「(皆さんは昨年)11月から毎週末、危険な山道を、しかも多いときは1メートル近くの積雪の中、吹雪の中、母のために食料や水を届けてくださいました」

ボランティアたちは、畳替えや重い家具の移動、泥出しなどの重労働もする。やがて訪問を重ねるにつれ、綾子さんと会話も交わすようになった。

こうしたつながりは、山本さん母子の心にも変化をもたらした。

「すっかり気落ちして自信をなくしていた母が、皆様にお会いする回数を重ねるたびに、明らかに明るく前向きに変わっていくのが分かりました。人とのつながりによって、人はこんなにも変わるんだなど、大げさではなく感動しました。実際、訪れる人もほぼいない真冬の山奥まで毎週定期的に訪ねてくれる方々がいるということが、どれほど心強かったか分かりません」

山本さんは、綾子さんを見て、「地震は非常に不幸な経験だったけれど、皆さんとご縁ができたのだからいいこともあった」と思えるようになったという。手紙は心からの感謝の言葉で結ばれていた。

教会も、修道会も、支援のために動ける人があり余っているわけではない。だが限られた人数で力を合わせながら続けられてきた支援



積雪の中、支援先を訪問するボランティアやスタッフ、修道女たち

が、被災した人とその家族の心に届いている。

※カリタスのとサポートセンターでは、引き続きボランティアの募集を行っている。詳細はこちらから。



国内

広島・長崎へ 祈りの平和行進 日本山妙法寺が出発式



▲7月12日、第五福竜丸の船体の脇で出発式を行う日本山妙法寺の僧侶と信者たち

平和のための取り組みでカトリック教会とも協働してきた日本山妙法寺(事務局・東京都渋谷区)は7月12日、都立「第五福竜丸展示館」(江東区)で、被爆地広島、長崎へと向かう「2025年平和行進 東京・岡山～広島・長崎」の出発式を行った。カトリック教会も小教区単位や信者個人でこの行進に協力し、今年も岡山県の玉島、広島県の福山、三原の3教会が行進参加者に宿泊所を提供する。



日本カトリック映画賞授賞式 安田淳一監督「侍タイムスリッパ」に



▲大阪・関西万博「バチカンデー」の式典であいさつする教皇庁国務省長官ピエトロ・パロリン枢機卿



▲7月12日、日本カトリック映画賞授賞式であいさつする「侍タイムスリッパ」の安田淳一監督

第49回日本カトリック映画賞(主催=SIGNIS JAPAN/カトリックメディア協議会)の授賞式と授賞作品の上映会が7月12日、日本教育会館一ツ橋ホール(東京・千代田区)で行われ、約700人が参加した。受賞作品は安田淳一監督の『侍タイムスリッパ』。



参院選を前に「排外主義の扇動に反対」 NGOが緊急共同声明

7月20日投開票の参院選に向け、候補者や政党が外国人の「優遇見直し」や「脅威」を訴えていることに対し、外国人の人権に関わり続けているNGOが共同で緊急声明を発表。外国人排斥につながる言動に強く反対した。呼びかけた7団体の一つは「外国人住民基本法の制定を求める全国キリスト教連絡協議会」。賛同した256団体(7月8日現在)に「日本カトリック難民移住移動者委員会」はじめキリスト教関連団体が多数含まれている。



社会司教委員会 6月27日の死刑執行に抗議声明

日本カトリック司教協議会の社会司教委員会(委員長=森山信三司教/大分教区)は7月7日、白石隆浩死刑囚(34)の死刑が6月27日に執行されたことに対し、抗議する声明を発表した。声明は、前教皇フランシスコの言葉「たとえ犯罪者であっても、神のたまものであるいのちを生きる不可侵の権利をもっている」を引用。死刑は「人格の不可侵性と尊厳への攻撃」と訴えた。



「船員の日」に難民委がメッセージ

カトリック教会は、7月の第2日曜日を「船員の日」と定めている。日本カトリック難民移住移動者委員会の委員長、山野内倫昭司教(さいたま教区)は、今年もこの日を迎えるに当たってメッセージを発表し、海で働く人々とその家族に感謝し、その人々のために祈るよう呼びかけた。



▲バチカンデーの式典ではモーツァルトのミサ曲演奏中、バチカン美術館での『キリストの埋葬』(写真左側)の展示風景もスライド上映された

パロリン枢機卿が来日 万博「バチカンデー」に参加

バチカンの外交政策を主導する教皇庁国務省長官のピエトロ・パロリン枢機卿は、大阪・関西万博で6月29日に行われた「バチカンデー」の式典に参加するため来日した。今回の万博でバチカン・パビリオンは、「美は希望をもたらす」をテーマに、イタリアの画家ミケランジェロ・メリージ・ダ・カラバッジョ(1571～1610年)の傑作『キリストの埋葬』(バチカン美術館蔵)を展示している。



▲日本宣教会全国大会で研究発表をした中村敏牧師

日本宣教会全国大会 教派超え研究成果分かち合う

日本宣教会は6月28日、第19回全国研究大会を西南学院大学(福岡市)で開催した。4人の研究者が日本におけるキリスト教会の宣教についての研究成果を教派を超えて発表し合った。オンラインも含め研究者・学生ら48人が参加した。



大阪高松教会管区が司牧者研修 多様性に希望 共に宣教へ

大阪高松教会管区が3年に1度行う司牧者研修会が6月9日から11日まで大阪市のサクラファミリア(大阪梅田教会)で開催された。同教会管区の4教区(名古屋、京都、大阪高松、広島)から、信徒を含め過去最多の120人を超える司牧者らが参加。シノドス(世界代表司教会議)第16回通常総会(2021～24年)で示された「ともに歩む教会」の姿を具体化していくことを目指し、「希望をもってともに宣教の旅へ」を開催テーマとした。



▲大阪高松教会管区の司牧者研修で講話を聞く参加者たち

## 国内

## 2025年度 定例司教総会 各委員長・担当司教を改選 戦後80年司教団メッセージ承認

日本カトリック司教協議会（会長＝菊地功枢機卿 / 東京教区）は6月16日から19日まで、東京・江東区の日本カトリック会館で2025年度定例司教総会を開いた。司教協議会の各種委員会委員長・担当司教の改選を行ったほか、戦後80年司教団メッセージと日本カトリック司教団核兵器廃絶宣言文を承認した。

総会には、司教17人が出席し、オブザーバーとして日本カトリック管区長協議会と日本女子修道会総長管区長会の代表4人も参加した。

日本の司教団として、戦後50年には「平和への決意」、戦後60年には「非暴力による平和への道～今こそ預言者としての役割を～」、戦後70年には「平和を実現する人は幸い～今こそ武力によらない平和を」という平和メッセージを発表してきた。

今年は、戦後80年に当たり、現在の政治社会状況を目の当たりにして、司教団として改めて平和メッセージを出す必要があると考え、準備を重ねてきたが、本総会において戦後80年司教団メッセージ「平和を紡ぐ旅 ― 希望を携えて―」を承認した。

「わたしたちは歴史的事実に誠実に向き合い、学び、記憶にとどめ、次世代に伝え、平和のために生かしていかなければなりません」。司教団はこのように語りかけ、今回は特に若者に対して、このメッセージを読んでもらい、平和について考えてほしいという思いから、平易な表現でまとめた。

また、戦争が世界各地で行われている現実に触れながら日本の現状に目を向け、「沖縄をはじめ、南西諸島においても、『防衛』の名のもと、次々とミサイルが配備されています」と指摘し、「今の日本は、果たして平和への道を進んでいるのでしょうか」と問いかけている。

さらに、日本原水爆被害者団体協議会（被団協）のノーベル平和賞受賞にも言及し、世界と日本政府に対して、「一刻も早く核兵器禁止条約の署名・批准に向けて行動することを強く求め」ている。

最後に、聖書が語る平和について述べた後、聖年を祝っているカトリック教会として、平和への歩みを自らのものとし、「希望を携え、平和を紡ぐ旅をともに歩み続けてまいりましょう」と呼びかけた（本紙6月号に全文掲載）。

また、「日本カトリック司教団核兵器廃絶宣言2025」を承認した。司教協議会として「核兵器廃絶」についての見解を公

表していなかったことから、戦後80年の今年、その態度を表明することが望ましいとの意見で一致し、準備を重ねていた。

宣言文では、①被爆の実相を世界中に伝え、核兵器の非人道性を訴え続けること②核兵器廃絶を目指す国内外の運動と連帯し、その実現に向けた行動を推進すること③核兵器禁止条約(TPNW)の理念を支持し、日本政府が一刻も早くこれを署名・批准するよう働きかけること④平和教育や啓発活動を通じて、次世代に平和の理念を引き継ぐこと―を続けていくと宣言している。（本紙6月号に全文掲載）

その他の主な報告事項と審議事項は次の通り。

## 報告事項

▼叙階5年前後の司祭を中心に国内での司祭生涯養成プログラムAを2027年に、叙階後15～20年の司祭を対象に海外での司祭生涯養成プログラムBを2029年に実施する予定。

▼シノドス（世界代表司教会議）第16回総会を受けて、日本の教会としてシノドス最終文書について理解を深めるための勉強会を開催するほか、最終文書の解説書を発行することが提案された。

## 審議事項

▼日本カトリック司教協議会各種委員会委員長・担当司教を下表の通り改選した。

▼FABC（アジア司教協議会連盟）第12回総会代表参加者として成井大介司教、エドガル・ガクタン司教を選出した。また、補欠候補者として森山信三司教を選出した。

▼本司教総会での諸意見を加味して修正したカトリック儀式書『ミサ以外のときの聖体拝領と聖体礼拝〔改訂新版〕』第4章の増補・改訂式文を認可し、その日本語訳改訂版を認証のため教皇庁典礼秘跡省に提出する予定。

## 日本カトリック司教協議会各種委員会委員長・担当司教

## 常任司教委員会直轄委員会関連

財務委員会委員長 梅村昌弘司教  
 教会行政法制委員会委員長 梅村昌弘司教  
 司教修道者合同委員会担当 菊地功枢機卿、前田万葉枢機卿、中村倫明大司教  
 未成年者等ガイドライン運用促進委員会委員長 菊地功枢機卿  
 同担当司教 ヨゼフ・アベイヤ司教、成井大介司教  
 司祭・終身助祭生涯養成委員会委員長 エドガル・ガクタン司教  
 同担当司教 アンドレア・レンボ司教  
 用語検討特別委員会委員長 梅村昌弘司教  
 日韓司教交流会 中村倫明大司教、勝谷太治司教（窓口）、酒井俊弘司教

## 福音宣教司教委員会関連

福音宣教司教委員会委員長 中村倫明大司教  
 福音宣教委員会委員長 中村倫明大司教  
 ＊ラウダート・シ部門担当司教 成井大介司教  
 ＊青少年司牧部門担当司教 アンドレア・レンボ司教  
 ＊外国籍信徒司牧部門担当司教 山野内倫昭司教  
 ＊聖書教理部門担当司教 前田万葉枢機卿  
 典礼委員会委員長 白浜満司教  
 学校教育委員会委員長 中野裕明司教  
 列聖推進委員会委員長 大塚喜直司教  
 エキュメニズム・諸宗教委員会委員長 中村倫明大司教

## 社会司教委員会関連

社会司教委員会委員長 森山信三司教  
 正義と平和協議会 エドガル・ガクタン司教  
 部落差別人権委員会委員長 ウェイン・バートン司教  
 難民移住移動者委員会委員長 松浦悟郎司教  
 子どもと女性の権利擁護部門担当司教 森山信三司教  
 HIV/AIDS部門担当司教 森山信三司教

## 広報宣教司教委員会関連

広報宣教司教委員会委員長 勝谷太治司教  
 広報委員会委員長 勝谷太治司教 / 同担当司教 酒井俊弘司教

## 事業体

カリタスジャパン責任司教 成井大介司教 / 同担当司教 森山信三司教

## 国内

# 映画『長崎—閃光の影で—』

## 松本准平監督インタビュー

### 「共にいる」世界を描く

広島・長崎への原爆投下から80年を迎える今年の夏、カトリック信者の松本准平さん(40/東京・成城教会)が監督を務めた映画『長崎—閃光の影で—』が公開される(日本カトリック司教協議会推薦)。原爆投下後の長崎で、看護学校の同級生のスミ、アツ子、ミサヲが被爆者らの命を救おうと奔走する物語だ。長崎出身で被爆3世でもある松本さんに、映画製作の経緯や作品に込めた思いを聞いた。



松本准平監督

#### 祖父の被爆体験との出会い

松本さんは映画プロデューサーの鍋島壽夫さんから、原爆投下後の長崎を描く映画の製作を打診され、2019年から準備を始めた。鍋島さんは、長崎の原爆投下までの24時間を描いた映画『TOMORROW 明日』(1988年公開)のプロデューサーで、いずれは原爆投下後の世界を描きたいという構想を持っており、適任の監督を探していたのだという。

「中学校に行く時には爆心地を通らなければならなかったですし、長崎出身の被爆3世としての意識は(以前から)ありました。信者として愛の教えを常に聞いている一方で、それとは全く違う、原爆を落とされた世界で生きているということ、強く意識していた」松本さんは、「いつか原爆のことを(映画で)描いてみたい」と思っていた。

映画の脚本は『閃光の影で—原爆被爆者救護 赤十字看護婦の手記—』(日本赤十字社長崎県支部)を基に、松本さんが考えられる限りの資料に当たって執筆された。その準備の過程で、ふと祖父・徳三郎さんの名前をネットで検索してみると、長崎新聞のウェブサイトにて徳三郎さんの被爆体験の手記がアーカイブとして残されているのが見つかった。

「祖父が被爆者の会で長年活動していたのは知っていましたが、原爆の話は直接聞いたことは一度も記憶にありませんでした。その手記には、聞いたことのないことが書かれていました」

手記には、防空壕を

掘っている時に原爆が落ちたこと、仲間数人で友人を探しに行ったものの、友人の姿を見て怖くなって逃げ出したこと、核兵器廃絶への思いなどが書かれていた。既に映画を撮影すること自体は決まっていたが、松本さんは手記を読み「自分の祖父のことを撮るんだ」という気持ちを強めた。

#### 共にいること

松本さんはこの映画のテーマは「インマヌエル」(=共にいる神)だと断言する。作品には、未曾有の兵器によって突然日常を奪われた極限状態の中でも、3人の少女たちが負傷者に寄り添い、互いに寄り添い合う姿が描かれている。

そして松本さんは自身の信仰と、映画を製作することの関係をこう話す。

「僕は自分の映画は、常に自分の信仰と関わっていると思っています。愛するということはどういうことなのか(を自身に問うこと)、自分の罪深さを感じることに、そういうものと自分の映画を切り離すことができません。その罪深さの中でも、イエスキリストの教えに従って歩みたいし、人を愛したい。そういう思いは映画にかなり出ていると思っています」

例えば、負傷者が水を欲しがっても水を飲ませてはいけない、と教えられているスミが水を飲ませることができないシーン。スミ自身が選んで罪を犯しているわけではないが、スミの水を飲ませることができなかった罪悪感、人を救うことができない罪悪感が表現されている。

またこの作品には、朝鮮人が差別されていたことも描かれている。「元々(原案の)手記には差別があったことは書かれていませんでしたが、看護師たちが『アイゴー』(=朝鮮半島の言葉で、嘆き悲しんだりしたときに使われる感嘆詞)という『叫び』を聞いたことが書かれていました。他にも資料に当たってみて、医薬品が不足する中、朝鮮半島出身者が後回しにされていることを事実として確



長崎に帰る列車の窓から外を眺める看護学生(左から)アツ子、ミサヲ、スミ (©2025「長崎—閃光の影で—」製作委員会)

認しました。これが当時起こったことだとしたら、(きちんと)描きたいと思いました」

#### 平和の道具として

松本さんは、映画の公開が戦後80年を迎えた今年の夏になったのは、たまたまと言うが「元々は2019年から企画が始まり、23年に撮影をしましたが、コロナ禍を挟んでいるので、製作の進行スピードが遅くなったこともありましたが、でも22年にロシアのウクライナ侵攻が始まって、核兵器の使用がちらついてきて、この映画を撮らなければならない、とペースを上げました。「今年に入ってさらに核兵器使用の懸念が高まっていると思います」

松本さんは被爆者をはじめ多くの人々によって受け継がれてきた記憶、言うなれば「平和の灯」を消さないため、特に若い世代の人たちにこの映画を見てほしいと考えている。

作品を見る人に一番伝わってほしいことを問うと、松本さんはこう答えた。

「大事な出来事(原爆投下後の世界)を描く中で、自分のエゴ(自分だけの思い)でメッセージを伝えたいということはありませんでした。自分の祖父のことを思いながら、(被爆者たちが)1カ月間どういう思いで過ごしていたか、極限まで近付いて撮りたいと思いました。見る人それぞれが3人の少女たちを通して、長崎のあの日の出来事に触れていただいて、それぞれがそれぞれの形で核兵器、戦争、平和、人間、神について考えてもらえたらうれしいです」「この映画が世界にとって平和の道具になるといいなと思っています」

『長崎—閃光の影で—』は、7月25日(金)から長崎県内で先行公開、8月1日(金)からTOHOシネマズ日比谷(東京)ほかで全国公開される。配給はアークエンタテインメント。

映画の公式サイト⇒



## 主日の福音解説

8月3日 (年間第18主日)

ルカ 12・13-21

## 188カ所巡り?

先日、E T V特集を見た。「密着 ひきこもり遍路～自分を探す二百万歩～」。ひきこもりで苦しむ5人の若者が地元の支援者と共に四国八十八カ所を巡る2カ月間にNHKが密着した記録番組である。日々出会う困難を若者たちが懸命に乗り越えて成長していく姿に、テレビの前の私も思わず胸が熱くなった。

今日ご紹介したかったのは番組の「主人公たち」というよりも、道中彼らが出会った一人の青年のことである。仮にA君としておく。A君は静岡出身でなんと静岡から四国まで歩いて来たのだという。その上でさらにお遍路を旅しているのだ。聞けば交際していた女性と数カ月前に別れたとのこと。女性に病気が見つかって医者が言うには余命3年。宣告を受けた後も青年は女性と会い続けるのだが、会うたびに涙があふれて止まらない。女性の方としてみれば好きな人と会うのはうれしいが、会うたびに泣かれてはたまらないとついに別れ話を切り出す。A君はショックを受けるが最後はそれを受け入れる。そして、これを機に自分の何かを変えたくて限界まで歩こうと決意する。その旅の途中、ひきこもりで苦しむ5人の若者と遭遇するのである。

私が本当に紹介したかったのはこの時A君が5人に語った言葉である。「今日一日ご飯が食べられたらそれでいい。もう、生きてること以外は全部手放そうと思った。生きてることだけを残して後は全部捨てよう。そう考えたら自分が多くの欲に取り付かれていることが分かった」。目を輝かせながら語る青年の言葉がいつまでも消えずに残った。

今日の福音もまさにこうした欲とわれわれがどう向き合うかがテーマになっている。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。

有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである」(ルカ12・15)とイエスは言う。この言葉の意味についてはもはや説明を必要としないであろう。問題はこれをどう生きるかである。実際、欲をどう手放せばいいのだろう。テレビを通して青年たちを応援していたせいか、考えることをいったんや

めて歩きたくなった。困難に直面した時、あるいは人生の岐路に立たされた時、人は無心に歩いてみたいと思うのかもしれない。

そこで皆様をお願いしたいのは、これから書く事は田舎司祭の独り言だと思って片目を、いやできれば両目をつぶっていただきたいということである。日本に全国の教会を歩いて巡る公式の巡礼路をつくってはどうか。欧州にはサンティアゴ・デ・コンポステラがあり、日本仏教には先の四国八十八カ所がある。今まさに「希望の巡礼者」をテーマに聖年を過ごしている最中である。日本にもそうした人々を受け入れるキリスト教の巡礼路が整備されたらどんなにいいだろうと思う。札所の数は188。ペトロ岐部と187殉教者に由来する数だが、札所になる教会は殉教者にゆかりがあってもなくても構わない。仏教に四国八十八カ所、キリスト教に188カ所、悪くないと思うのだが。

(熊川幸徳神父/サン・スルピス司祭会)

8月10日 (年間第19主日)

ルカ 12・32-48

または 12・35-40

## 主の思い

今日わたしたちは、イエス様からちょっと厳しい警告を聞いています。今日の福音は、特にわたしにとって怠惰になったり、自分のやるべきことを真面目にしなかったりする時、心を引き締め

てくれる言葉です。今日の福音のメッセージをまとめると、主人が来るまで主人の考え通りに忠実に働き、準備していなさいということです。しかし、イエス様の話はこれで終わりではありません。「主人の思いを知らずながら何も準備せず、あるいは主人の思いどおりにしなかった僕は、ひどく鞭打たれる」。さらに、こう

言われます。「すべて多く与えられた者は、多く求められ、多く任された者は、更に多く要求される」

この言葉を理解するためには、まずわたしたちが主の思い、つまり主のみ心をどのくらい知っているのかを反省しなければなりません。もちろん、普遍的な主のみ心は信仰のうちにわたしたちがよく知っているものです。わたしたちが主の道をそれることを望まれず、全ての人が救われるのを望んでおられる創造主のみ心、いつもわたしたちと共におられ、想像できないほどわたしたちを愛しておられる神のみ心をわたしたちは知っています。それ故、究極の主の思いは、わたしたち皆がイエス・キリストによってご自分と共に永遠に生きることなのです。

ところで、ここで言われる主の思いは、そのような普遍的なものではなく、わたしたち自身に望まれる神のみ心です。すなわち、神がわたし自身に任せられたことと、自分がどのように生きべきかについて悟らなければならないということです。

わたしたちはいつもどうすればいいのか、何をしなければならないのか悩み、主にお尋ねします。実にわたしたちは主から多く頂いている者です。あるとき、わたしたちは頂いた全ての物によって傲慢になる自分自身に気づき、その頂いた全てを隠しておこうとしたこともあります。しかし、わたしたちが神から何を頂いたのかにはっきり気付いたら、頂いた能力、才能を隠しておくことを神は望まれないことが分かるのです。

わたしたちが神から頂いたもの、そして神がわたしたちに任せられたことを見ると、その中に神のお望み、つまり、「主の思い」が隠されているのが分かります。そのようなものを頂いたのが分かったのに、主の思い通りに活用したり、準備したりしないなら、今日の福音の言葉通りにわたしたちは主にひどく鞭打たれることになるでしょう。従って、わたしたちは与えられた才能のみならず、自分の人生のあらゆる出来事や経験から主の思いを見いだしていなければなりません。ただし、今分かっていない、気付いていないからといって絶望する必要はありません。わたしたちが祈りを手放さない限り、神はご自分のお定めになる時、わたしたちが何をすべきかについて教えてくださり、導いてくださるからです。主に信頼を置き、諦めることなくこの道を進んでいくことに致しましょう。

(ダニエル・キム・ドンウク<金桐旭>神父/韓国殉教福者聖職修道会)



主日の福音解説

8月17日 (年間第20主日)

ルカ 12・49-53

8月24日 (年間第21主日)

ルカ 13・22-30

### あなたがたに平和があるように！

イエス様がお生まれになった時、天使たちは「地に平和 神がお喜びになる人々に」と声高らかに歌いました（ルカ2・14参照）。

今、世界は「息子や娘、嫁が父や母、しゅうとめたちに逆らう」（ミカ7・6参照）とあるように、神様を忘れ、人が互いに恐れ合い、争うことをやめず、一致することができない現実に直面しています。

イエス様は「受けねばならない洗礼バプテスマがある。それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむことだろう」と言われます。その洗礼とは、人々の争いの中で板挟みになって苦しめられている人と共に圧迫され、締め付けられるものです。

イエス様はさらに、父や母、しゅうとめたちが息子や娘、嫁に逆らうことについても言及されます。より弱い立場の人々へ逆らってはいけないこと、やさしい配慮、寄り添うことの大切さを教えられます。わたしたちが普段の生活の中で、孤独（寄り添いのなさ）を感じる時も、私たちは平和ではありません。イエス様はわたしたちの日常の苦しみもご自分の苦しみとして受け止め、寄り添ってくださいます。



また、イエス様はわたしたちの中に、火が燃えていることをお望みです。その火はわたしたちの中にある不純なもの、いらぬものを全て燃やし尽くす火です。人を傷つけるあらゆるもの、武器だけでなく、人を攻撃する心を焼き尽くします。「武装することではなく、武装を解く平和を」と、新しいパパ様レオ14世もわたしたちに教えてくださっています。

第1朗読で、人々のために神様のことばを伝えたエレミヤは、「この民のために平和を願わず、むしろ災いを望んでいる」（エレミヤ38・4）と誤解されます。

「地に平和（仲良くすること、安全、無事、健康）を与えるためにわたしが来た時、あなたがたは思うのか。そうではない、わたしは言う。むしろ分かれ争い（部分に分ける、分配、分け与える、分割、分裂）をあなたがたに」（ルカ12・51参照）は、イエス様が分裂をもたらすかのように聞こえるかもしれませんが、そうではありません。

わたしたちのイエス様はご自分の平和を顧みず、人々の苦しみに寄り添い、人々のためにご自分の全てを与え尽くすキリストです。

イエス様は「私がいつも一緒だよ。あなたたちも人々に寄り添いなさい」と声を掛けてくださっています。

「常に平和を追求し、常に愛を求めて、人々に寄り添うこと、特に苦しんでいる人に寄り添うことを願う教会です」（5月8日、最初の「ウルビ・エト・オルビ」の祝福における教皇レオ14世のことば：カトリックジャパンダイジェスト5月号2面から）

（寺浜亮司神父／福岡教区）

### イエスは神の国そのもの

神の国に入ること（救い）を巡ってのイエスの教えが本日のルカ福音書の内容です。

「主よ、救われる者は少ないのでしょうか」という質問に対して、イエスは「狭い戸口から入るように努めなさい」と答えています。また、神の国に「入ろうとしても入れない人が多いのだ」とも言っています。神の国に入るのはとても難しく、救われる人はそんなに多くはないと受け取れるようなイエスのことばです。

ところが、後半部分を見てみると「アブラハム、イサク、ヤコブやすべての預言者たちが神の国に入っている」「人々は、東から西から、また南から北から来て、神の国で宴会の席に着く」とあります。多くの人たちが神の救いにあずかっている様子が描かれています。

果たして、救われる人は多いのか少ないのか、よく分かりません。しかし、神が全ての人の救いを望んでおられるのは確かなことです。

イエスは神の国の戸口はいずれ閉じられてしまうから気を付けなければならないことを例えて語っています。

神の国の戸口が閉じられてしまった後では、どんなに後悔しても、言い訳をしても、決して再び戸口が開かれることはないと言っています。これはモタモタしないで神の国に入ることができるよう生き方をしなさいという呼びかけでしょう。

また、神の国の戸口はもともと広いものなのに、それを自ら狭くしている者たちへの厳しいことばです。イエスが語る福音をかたく受け入れようとしない人々への警告でもあります。

さて、「主よ、救われる者は少ないのでしょうか」という質問は、イエスが町や村を巡って教えながら、エルサレムへ向かって進んでおられた時に出されたものです。エルサレムとは、言うまでもなく十字架が待ち受けている地です。

「狭い戸口から入るように努めなさい」と教え、十字架の道を歩むイエスの生き方の中に神の国があります。イエスは神の国そのものです。

神の国とは場所や空間のことではありません。神による支配という意味で状況・状態を表します。いのちを慈しむ神の愛に満ちあふれている状況・状態が神の国です。全ての人々が神に愛されていることに信頼し、人を愛し、ゆるす生き方をする時、そこに神の国が実現していきます。



（立花昌和神父／東京教区）

主日の福音解説

8月31日 (年間第22主日)

ルカ 14・1、7-14

無償の愛

本日の福音でお返しができない人として、「貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人」が挙げられています。果たして本当に彼らはお返しができないのでしょうか？

私はこれまでの人生の中で、それなりの数の方々と出会いました。経済的に裕福な人とそうでない人、あるいは健康に恵まれた人とそうでない人、老若男女さまざまです。確かに経済的に恵まれている人から高価なものを頂いたことはありますが、いつもではありません。逆に質素に暮らしている方から思いがけないものを頂いたことも多々あります。

イエス様はこのお話を通して、私たちに何を伝えたかったのでしょうか。



私は「見返りを求めないこと」だと思います。私たちは「他人を大切に」と言いながらも、どうしてもそれ以上に自分への見返りが意識からなくなります。「他者の喜びが私の喜び」でありたいのに、実際はその瞬間に素直に喜べない時もあるのです。

司祭叙階前、研修として1年半ほど、ブラジルへ行かせていただきました。そこでは経済的に恵まれない人との出会いもたくさんありましたが、日本の教会では感じられない生活に圧倒されました。そこには人々の生活の中心に「キリスト教」が充満していました。まさに「貧しい人は幸いである」がそこにありました。

私は甘い物が苦手というか、食べたいとは思わないのですが、このことをブラジル人に話した時、「病気か？」と心配され、「そうでない」と答えると「面白い冗談だ」と大笑いされました。その後、あるご家庭に呼ばれた時に驚きました。冷蔵庫にギリギリ入る特大サイズのケーキがあったのです。

「これ、あなたのために買って来たから、一緒に食べましょう」と言われ愕然としました。彼らは私が甘い物が大好きだと確信し、少ない稼ぎの中から最大限のもてなしを日本から来た神学生である私にしてくださったのです。そのことに心底感動しました。この体験が司祭職への意欲を高めたことは言うまでもありません。

「人には良い物をあげなさい」  
「その人からのお返しは考えてはいけない」  
私の祖母が常々口にしていた言葉です。

「与えなさい」「与えなさい」「また、与えなさい」  
この姿勢(生き方)は「信仰・希望・愛。この中で最も大いなるものは『愛』である」(一コリント13・13参照)の体現です。物価高や自然災害など心を騒がせるニュースが多い今だからこそ、改めて自分の生き方を見つめ直す時ではないでしょうか？  
後先考えず「無性に」与えることができますように。

(山田利彦神父/神言修道会 カットは全て高崎紀子)

文化

短歌

春日てみ道

はがきでの短歌投稿の規定は左下枠内を参照。下記QRコードからオンライン投稿も可。



俳句

稲畑廣太郎選

はがきでの俳句投稿の規定は左下枠内を参照。下記QRコードからオンライン投稿も可。



野に小さき紫の花を目に留めし人のありてぞ董生まれぬ  
【評】野に咲かかれんな董の花、見過ごしてしまいがちだが、立ち止まり目を留めることで初めて董の存在が認識される。漠然と物を見るのではなく、姿や色を心に深く留めることが大切。見るこの本質がここにある。  
煙草吸うかと見え男の子の昼休みしゃぼんの玉を吹き始めたり  
私から私たちへと発想の転換をして社会を変えたし  
子育てをリスクと宣ふわが娘命賭けたる母を忘るな  
昭和二十三年家族揃って受洗せしわが土屋家に司祭生れたり  
ご帰天の前日世界の人々に手を振る教皇を決して忘れじ  
聖母月チューブと装具に守られて外出許可受くマリアに涙  
掛け布団の内側に数多の十字架見ゆ復活の主に包まれ眠る  
曾野さんの歯に衣着せぬ痛快なコラムの読めぬを寂しく思う  
昼の間の話し相手の猫と共無口な娘の帰宅待ち侘ぶ  
小平 鈴木真木子  
横濱 石川むつみ  
豊橋 赤澤 進  
町田 樋口 裕子  
東京 山下 越子  
秋田 畑山真理子  
宮津 杉本 友子  
横濱 吉村 一  
那須塩原 林 秀雄  
横浜 永井 栄司

◎聖五月バチカン広場沸き立ちぬ 川崎 吉田千津子  
【評】新教皇レオ十四世への心からの存問  
◎夫の名を呼べど臍に消えゆけり 神戸 内田 泰代  
【評】御夫君を亡くされた悲しみを季題に託して  
ひっそりと咲き満ちにけり花菖蒲 仙台 三宅 温子  
父の日の空へつなげる糸電話 東京 草間をり絵  
鯉幟千びき共に風を受け 草加 長谷部禎子  
風の道水の道行く夏つばめ 神戸 涌羅 由美  
蘇る若葉産声いきいきと 川崎 守田 光代  
教会の裏十葉の白き園 大阪 酒井 湧水  
夏めくやテールブルクロス買ひ替へて 丹波篠山 高岡すみ子  
鯉のぼり戦なき空あをあと 松山 丹下はつみ  
薫風に天を見上げて主の祈り 豊橋 赤澤 進  
疎開の荷牽く牛宿む鉄線花 神戸 屋代 弘忠

投稿規定  
短歌・俳句共に、未発表の自作をはがきまたはオンラインで送りください。一回につき短歌は一人3首まで、俳句は5句まで。お名前に振り仮名を付けてください。はがきの送り先は、〒135-8585 東京都江東区潮見2の10の10 カトリック中央協議会広報部広報課「短歌係」または「俳句係」。締め切りは毎月5日(必着)です。作品は選者の先によって添削されることがあります。

大の字の軒で目覚む昼寝かな 府中 荒井 美邦  
ローマより吹きわたる風新樹晴 神戸 平尾 孝子  
地球号壊さないでとみどりの日 各務原 安江 郁子  
夏空に揚がる白煙立つ教皇 秋田 畑山真理子  
水の黙堂解いてゆきにけり 選者吟

# 訃報

荒井聰子(としこ)修道女(純心聖母会) 6月13日、皮下出血後遺症のため逝去。87歳。1937年神奈川県生まれ。鹿児島純心女子中学校編入



学時に洗礼を受け、56年に同会の学生志願生となった。63年初誓願。72年終生誓願。初誓願後、東京、長崎、鹿児島で教職に就きながら勉学を続けた。83年に英国・オックスフォード大学で学位を取得。同会の要職で活躍するとともに、共同体への奉仕にも尽くした。95年から2001年まで鹿児島純心女子大学(現・鹿児島純心大学)の学長を務め、その後も09年3月まで大学で奉職。職務を終えた19年から長崎の同会ベタニア修道院に派遣され、レクリエーション係として機知に富んだ遊びを準備し姉妹たちを楽しませた。今年4月に転倒し入院生活を余儀なくされ、日々を十字架のイエスにささげていた。6月13日に容態が悪化し、静かに御父のみもとに召された。

加藤富子修道女(ノートルダム教育修道女会) 6月16日、京都市内の同会岩倉修道院で老衰のため逝去。90歳。1934年三重県生まれ。59年に起きた伊勢湾台風の被災地で奉仕する同会会員や志願者の



姿に触れて、62年に同会入会。67年初誓願。ノートルダム女学院中学高等学校、ノートルダム学院小学校、同会本部(以上京都)で長年にわたり事務職や会計業務に携わった。親譲りの深い信仰を持ち、清貧に、きちょうめんに使徒職を全うした。ユーモアのある明るい性格を持ち、特技のぬいぐるみ作りでバザーに貢献することもあった。

中濱繁喜(しげき)神父(長崎教区) 6月16日、長崎市内の病院でS状結腸がんのため逝去。61歳。1963年長崎県生まれ。90年司祭叙階。同年4月浦上助任。95年中町助任。97年黒島主任。2005年神崎(こうざき)主任。11年大曾主任。17年西木場主任。23年青方、丸尾主任(以上長崎)。24年4月から病氣療養していた。何事にも力を尽くし、教会の信者のために祈り、働き続けた実直な司祭で、多くの人々から愛された。司牧現場では常に第一に子どもたちのことを思い、教会での自分の務めを果たそうとする姿勢が見られた。信者との関わりを大切に



にし、司祭たちに兄弟のように接し、心を配った。病気が見つかって闘病生活に入ってから教会に帰ることを願い、病に打ち勝とうと前向きだった。「信徒のそばで司祭として生きる」と、最期の時まで強い信念を持って生き抜いた。

u-sacred-heart.ac.jp 聖心女子大学キリスト教文化研究所他  
 ▶写教の会(その日の福音を毛筆で写し、心を主に向ける集い) 8月17日(日)午後4時30分～5時50分、麴町教会岐部ホール309号室。主宰=高橋登志子修道女(聖心会)。持参する物=筆ペン、文鎮、下敷き30×50釐(フェルトまたは新聞紙)。8月14日(木)までに要参加申し込み。500円(自由献金)。☎phostere@gmail.com 古賀

▶青年の祈りのひととき 8月22日(金)午後6時30分、聖アウグスチノ修道会聖アウグスチノ修道院。祈り、分かち合い、茶話会。対象=18歳(高校生は除く)～35歳でカトリックの祈りや信仰に心が向いている人(宗教不問)。参加司祭=小田武直神父(東京教区)。下記QRコードから要申し込み。電話080-8259-0993 東京教区教皇庁宣教事業 田所



# 番組

## ラジオ心のともしび

(朗読・坪井木の実)

8月の放送日と執筆者 1日(金)古川利雅・2日(土)崔友本枝(ちえー・ともえ)・4日(月)山本ふみり・5日(火)片柳弘史・6日(水)服部剛(ごう)・7日(木)こいずみゆり・8日(金)山本久美子・9日(土)松浦信行・11日(月・祝)許書寧(きよ・しゅにん)・12日(火)竹内修一(おさむ)・13日(水)三宮麻由子・14日(木)古橋昌尚・15日(金)森田直樹・16日(土)コリン・ダルトン・18日(月)今井

美沙子・19日(火)萩原久美子・20日(水)岡野絵里子・21日(木)湯川千恵子・22日(金)熊本洋(よう)・23日(土)西田仁・25日(月)谷口恵美(めぐみ)・26日(火)中井俊巳・27日(水)堀妙子(以上テーマ「正しさと優しさ」)・28日(木)コリン・ダルトン・29日(金)古橋昌尚・30日(土)植村高雄(以上テーマ「歳を重ねて」)。

ホームページ(下記QRコードでアクセス可)では24時間視聴可能。詳細は電話075-211-9341。



ラジオ YBU 心のともしび 5分			
放送局	放送日(曜日)時間	放送局	放送日(曜日)時間
STVラジオ	月～金=5:35 土=5:00	KBS京都	月～金=5:55 土=5:15
		毎日放送	月～金=5:45 土=4:55
		和歌山放送	月～金=6:35 日=6:15
		ラジオ関西	月～金=5:35 日=6:05
エフエム青森	月～土=6:50	山口放送	月～土=5:25
I BC岩手放送	月～土=5:20	中国放送	月～土=5:00
ラジオ福島	月～土=5:25	山陽放送	月～土=5:25
エフエム仙台	月～金=5:55	山陰放送	月～土=5:25
山形放送	月～土=5:10	南海放送	月～金=5:25 土=6:45
エフエム秋田	月～土=5:55	四国放送	月～金=5:10 土=6:10
新潟放送	月～金=5:25 日=6:20	高知放送	月～金=5:20 日=6:35
ニッポン放送	月～金=5:35 土=5:25	RKB毎日放送	月～金=5:25 日=6:00
信越放送	月～金=5:25 日=6:15	熊本放送	月～金=5:10 日=6:05
山梨放送	月～土=5:25	長崎放送	月～金=5:25 土=6:35
静岡放送	月～金=5:25 土=5:40	大分放送	月～金=5:25 土=7:00
福井放送	月～金=6:45 土=5:50	宮崎放送	月～土=5:20
北陸放送	月～土=5:15	南日本放送	月～金=5:25 日=6:05
東海ラジオ放送	月～金=5:45	琉球放送	月～土=5:25
北日本放送	月～金=6:30 土=5:30		

# 告知板

## 東京

▶特別展「岩下壮一という多面体～20世紀のフランシスコ・ザビエル～」(第1期 導かれるままに[1889～1925]) 開催中(9月22

日<月>まで/午前10時～午後5時/日曜閉室)、聖心女子大学4号館聖心グローバルプラザBE \*hive 特別展示室。無料。電話03-3407-5811、☎jimukyosei@

## きょうをささげる(教皇による祈りの世界ネットワーク) 8月

### 【教皇の意向：共存】

共存することがより困難に見える社会が、民族的、政治的、宗教的、またイデオロギー的な理由による対立の誘惑に負けませんように。

### 【日本の教会の意向：平和】

広島と長崎に原子爆弾が投下されて80年を迎えるにあたり、私たちが今も世界各地で続く戦争の愚かさを悟って、平和への道を歩む勇気を持つことができますように。

多様性に対する不寛容が世界に広がっています。ロシアによるウクライナへの侵略、ガザでのイスラエルによる過剰な

武力攻撃、ミャンマーの軍事独裁政権による内戦状態をはじめ、共存を否定し、相手を暴力で排除しようとする問題が世界各地で続き、社会の分断を生んでいます。私たちはさまざまに違っていても、その究極において愛の神の家族の一員としてどの一人の人も尊厳を持ちふさわしく生きる権利を持っています。民族的、政治的、宗教的、イデオロギー的違いを超えて、相手を互いに尊重し、理解し、多様性を認める寛容な共存社会を強い心で育ていけるよう祈りましょう。

\*

昨年、日本原水爆被害者団体協議会が

ノーベル平和賞を受賞しました。広島と長崎に落とされた原子爆弾による被害の悲惨さを訴え続けてきた被爆者による長年の核廃絶への取り組みが認められての受賞でした。戦後80年を迎える中、世界の各地で紛争が生じ、武力衝突の緊張だけでなく核攻撃の可能性を威嚇として用いるという平和に逆行する国際情勢が続いています。被爆国としての立場から、核武装の愚かさを訴えながら、神の愛に基づく粘り強い対話と外交努力を通じて国際紛争を解決する信念に満ちた取り組みを進めていけるよう祈りましょう。